

写本装飾の位相：『マルグリット・ドルレアンの時 禱書』の余白装飾

田辺, めぐみ
帝塚山学院大学非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/21013>

出版情報：Stella. 30, pp.87-102, 2011-12-20. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：



写本装飾の位相

——『マルグリット・ドルレアンの時祷書』の余白装飾*¹⁾——

田 辺 め ぐ み

はじめに

14世紀後半以降、平信徒の個人用祈祷書としてフランスを中心に急速に普及した時祷書は、少なからぬ場合において、写本の注文主や所有主の意向を反映している¹⁾。かかる特質は、写本の物理的構造や本文の内容構成のほか、紋章や肖像画、挿絵の主題選択においてしばしば指摘されてきた。いっぽう写本余白部分に頻出する世俗図像については、当時の文化や時代背景を理解・把握するための史料として扱われるか、さもなくば各写本の帰属を確定し同一系統写本群の集成を図るための指標とみなされる傾向が強い。

こうした研究動向は、中世末期の写本画が「書物に施された絵画」という観点から捉えられてきたのにたいし、余白装飾は作品全体の形式・内容にとってあくまで「付属的・副次的要素」と位置づけられてきたことと無関係ではあるまい²⁾。たしかに、伝統的キリスト教図像から挿絵と余白装飾の相関関係が解明されることは稀である³⁾。しかしながら、当時の彩飾写本が主題の著しい多様化や聖俗文化の混淆の反映であることを考慮するならば、その余白装飾の生成がもはや単なる複写にはとどまらず、豊富な着想源に依拠するものだった可能性は小さくない。そのことは、政情不安のために多くの写本画家がパリを離れた結果、1420年代から30年代にかけ図像体系が極度に多様化・細分化していったことにも窺える。

時祷書の装飾が包括的考察の対象となりにくかった理由には、「中世末期のベストセラー」と称されるほど大量に生産された時祷書が、必ずしも注文制作ばかりではなく、しばしば写本所有主に関連する表象を記入・加筆するものだったことにも求められよう。譲渡・贈答用の豪華彩飾写本に異種混合の趣向が散見する点もまた然り。

このように他の写本構成要素とは関連性が薄いと見えがちな余白装飾であるが、他方で時祷書の私的な側面を明らかにすることも少なくない。その顕著な例が『プリジョン・ド・コエティヴィーの時祷書』⁴⁾ や、『カトリーヌ・ド・ローアンとフランソワーズ・ド・ディナンの時祷書』〔図版1-2〕⁵⁾ である。前者では、跡継ぎに恵まれない男女と夫婦待望の男児の姿が聖ゲノウェファの図像とともに子宝祈念を表象し、後者では、百年戦争下の政治的駆け引きのなかで非業の死をとげたジル・ド・ブルターニュ関連の様々な装飾モチーフが、写本所有主による亡夫の魂にたいする救済祈念を具現している。

フランス国立図書館所蔵の『マルグリット・ドルレアンの時祷書』(整理番号 ms. lat. 1156 B. 以下「マルグリット時祷書」と略記)〔図版3-8〕⁶⁾ については、様々な世俗主題選択に写本所有者マルグリットの関与が先行研究で指摘されている。それだけに、当該写本彩飾の構造を仔細に検証することで、上記例のように私的な「祈りのかたち」が明らかになる可能性はそうとうに高い。かかる問題意識のもと、本稿では、マルグリット時祷書の余白装飾の生成経緯を複合的なアプローチから検討し、時祷書が、聖職者用の聖務日課書を平信徒用に簡略化しただけのものではなく、個人的な祈念のための書物であることを考察・確認したい。

マルグリット・ドルレアンと時祷書

マルグリット・ドルレアンは、オルレアン公ルイと、ミラノ出身のヴァレンティヌ・ヴィスコンティとの娘として1406年に誕生した。しかし早くも翌年には父が暗殺され、さらにその2年後には母が他界する。彼女の不幸はこれだけにとどまらず、1412年には次兄ジャンが、そして1415年のアザンクールの敗戦では長兄シャルルまでもイギリスに捕囚されてしまう⁷⁾。かかる状況下で、シャルルが妹マルグリットのために注文し、イヴォネ・ド・ラ・ボットによって祈祷文が書かれたのが、マルグリット時祷書である⁸⁾。

同写本がマルグリットのために制作されたことは、男性形で書かれている聖母マリアへの祈祷文«Obsecro te» や、聖マルガリータの祝日の記載がない典礼暦からは窺えない。しかし聖母子の前に跪く女性の祈念像や (f. 25)〔図版3〕、古フランス語で「マルグリット」という名称をもつ雛菊の頻出にくわえ、いたるところに描かれた紋章やイニシャルの組み合わせ文字は、写本の彩飾が同妃

図版1 フランスワーズ・ド・ディナンの祈祷像
Rennes, Bibl. Métropole, ms. 34, f. 56.



図版2 『ピラトの審問』 Rennes, Bibl. Métropole, ms. 34, f. 11 v.



図版3 マルグリット・ドルレアンズの祈祷像
Paris, BnF, ms. lat. 1156 B, f. 25.

とブルターニュ公ジャン4世の末息子リシャール・デタンブとの結婚後になされたことを明示している。さらに紋章をあしらった旅行風景 (f. 159 v) や、諸侯達が剣を交える場面 (f. 160) からは、マルグリットの宮廷生活の一端が窺い知れる。このようにマルグリットが時祷書の彩飾に及ぼした影響に鑑みれば、他の世俗図像にも同様の傾向を求めることは可能ではなからうか。

エバーハルト・ケーニヒは、3人の写本画家が当該写本の装飾に携ったことを指摘している⁹⁾。それによれば、マルグリットとリシャールの結婚を機に、レンヌの無名画家が典礼暦の余白装飾と写本全体の基本彩飾に着手し、ついで1430年代にかけて、通称「マルグリット・ドルレ안의画家」(以下「マルグリットの画家」と略記)がすべての主題挿絵とその余白装飾を描き入れた。そして、基本彩飾のまま残されていた数葉の余白装飾については、1450年頃にエチエンヌ・ソドラがパリで仕上げたとされている¹⁰⁾。3人の写本画家のうち、レンヌの無名画家やエチエンヌ・ソドラが携った余白装飾が葡萄唐草を基調としているのにたいし、マルグリットの画家の作例には多彩な装飾要素が散りばめられており、その独創性は明らかである。

マルグリットの画家に着目し、その作品を集成する最初の作業は、1955年にパリで開催された展覧会の折りにジャン・ポールシェによって試みられた¹¹⁾。さらに1980年代以降、ケーニヒが画家の足跡をパリからブルジュ、レンヌ、そしてポワチエにまで辿る過程で、ブシコーの画家やランブール兄弟をはじめとする15世紀初頭に活躍した画家の図像レパートリーの影響をマルグリット時祷書の彩飾に確認し、多くの帰属不明の写本をマルグリットの画家の亜流と位置づけた¹²⁾。こうしてマルグリット時祷書の余白装飾と他の彩飾写本との様式上の相似点が指摘されることとなったが、その多彩なモチーフの着想源については、マルグリットの画家が手がけた『自然史の神秘』¹³⁾と『名人行伝』¹⁴⁾にくつつかが見出されたのみである。

マルグリット時祷書の余白装飾がいかに生成されたかを、画家の図像レパートリーから解明できぬとなれば、当然のことながら写本の所有者マルグリットとの関わりに触れざるをえまい。とはいえ、彼女の所有が確認されたのは『歴史物語聖書』と『叙情詩集』、この2点にとどまる¹⁵⁾。前者は同妃のために制作されたものではなく、また後者は彩飾が一切施されていないため、写本注文主が彩飾に与えた影響をここに求めることは不可能である¹⁶⁾。またマルグリッ

トについての記録は、オルレアン公領・ブルターニュ公領の古文書に断片的に言及されているにすぎず、その実像に迫る手立ては実質的に皆無と言わざるをえない。

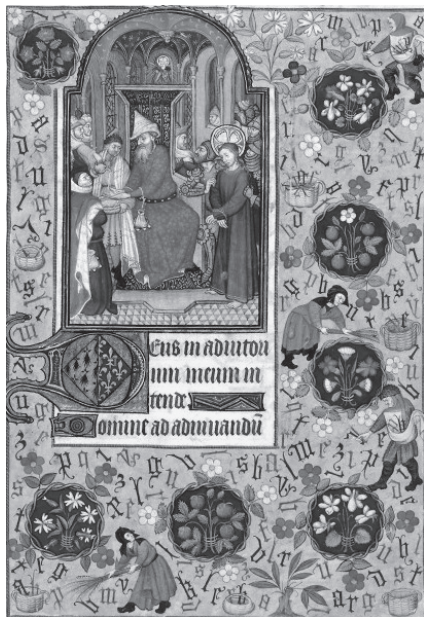
マルグリットやその蔵書にかんする史料が不足しているため、時祷書の明確な用途を把握することも難しい。信仰に篤くラテン語に通じ、愛書家でもあったルイ・ドルレアンとヴァレンティーヌ・ヴィスコンティが、子息の教育に熱心であったことは古文書等に確認できるものの¹⁷⁾、夫妻がマルグリットの生後間もなく死去したため、彼女が受けた教育の実態を探るのは困難なのだ。同妃の教養の高さを推察しうるのは、長兄シャルルが両親の蔵書をほとんど受け継ぎ、それらをプロワの図書館に所蔵していたこと、彼女は結婚するまでその地に身を寄せ、結婚後も兄の蔵書を借用していたという事実にかぎられる¹⁸⁾。

ただし今日確認されているマルグリットの蔵書が、マルグリット時祷書を除き、すべてフランス語写本であることに、彼女の祈念の実際を垣間見ることが可能である。当時の平信徒の女性は、ラテン語を「読む」ことと「理解する」こととを必ずしも同義としていなかった。このことは、ラテン語の祈禱文からなるマルグリット時祷書のまさに装飾のほうに、祈念を導くための重要な役割が課されていたことを推察させる。

余白装飾に見る多元性

マルグリット時祷書の余白部分を彩飾する世俗主題が、写本所有主の個人的側面や時代背景の反映にとどまっていないことは、季節の労働図像から指摘できる。9月あるいは10月の寓意として知られる「葡萄の収穫」(f. 31)は、「春」を象徴した様々なモチーフとともに「受胎告知」の余白装飾を構成している。月暦図のような季節の寓意としての機能が認められない作例は、「キリストの洗礼」に伴われている「小麦の収穫」(f. 161 v)にも求められる。また当時のアルプス以北では自生も栽培もされていなかった「柘榴の収穫」(f. 139)が描写されていることや、「豚の飼育」(f. 144)が「櫛の木」ではなく「栗の木」で表象されていることから、労働図像が必ずしも現実世界をそのまま復元したものでもないことが確認できる¹⁹⁾。

同様の傾向は、「ピラトの審問」の挿絵を囲む枯枝採集の風景にも認められる(f. 135)〔図版4〕。人々が拾い集めている枝は、アルファベットの形態を帯びて



図版4 『ピラトの審問』

Paris, BnF, ms. lat. 1156 B, f. 135.



図版5 『聖ラウレンチウス』

Paris, BnF, ms. lat. 1156 B, f. 171.

いる。ケーニヒはこのモチーフの着想源を確定することができず、その主題挿絵との相関にかんしても明快な解釈を提示するには至っていない²⁰⁾。これにたいしダニエル・アレクサンドル＝ビドンは、女性が所有することの多かった時祷書が、日々の祈祷以外にも子女の初等教育に用いられていた事実や、木や枝がしばしば文字習得に利用されてきたことから、上記図像が文字学習帳の役割を果たしていた可能性を指摘した²¹⁾。たしかに、他の写本に見られる整然と並べられたアルファベット一覧表とは異質であるが、散りばめられた文字を注意深く判読していくと、「m」が「n」に、「r」が「s」に隣接して配置されており、アルファベットの順序を考慮したものであるとわかる。また一般に王侯貴族の子女が6-7歳から文字学習を始めるのが常であったことと、マルグリットが夫リシャールの死去する1438年までに6人の子女を儲けていたことを考え合わせると、このモチーフは子女教育を目的としたマルグリットの要請にもとづくものと推察できる。

いっぽう、余白下部右にある太く短い幹に披針型の葉を繁らせた木はオリーブと同定されるが、枯枝採集図像の一環をなす理由を史実に求めることはできない。紀元前より地中海世界で親しまれてきたこの灌木は、中世末期にディジョンで栽培されていた事実が知られているものの、フランスではまだ広くは普及していない植物であったことが、オリーブの実の交易状況や、祝祭・農事等にかんする史料によって判明しているからである²²⁾。他方、図像中3本に分岐した各枝に3枚の葉からなるオリーブの形態は「三位一体」を想起させる。その採集風景と大洪水の終わり頃にノアの放った鳩がオリーブの小枝をくわえてきたこと（創世記8, 11）を重ね合わせ、世俗主題によって「神と人類の和解」ひいては「平和の象徴」²³⁾を表象することを試みた画家の作為が窺えるのである。

このようなキリスト教教義を表象する文字学習帳が、「十字架の時祷」の一時課に挿入されることとなったのは、どのような経緯によるのだろうか。むろん、「ピラトの審問」が描かれている一時課「Prime」が、イギリスで「初等読本」を意味する「primer」の由来となっていることを思えば、聖務日課における文字学習帳の存在理由は一見あきらかなようである。しかしながら初期読本としての時祷書の用途は「十字架の時祷」ではなく、一般には「聖母マリアの時祷」であった²⁴⁾。また、時祷書における文字練習帳の存在は、当時平信徒が暗唱することを常としていた「アヴェ・マリア」や「主の祈り」に多数確認されるも

の、十字架の時祷における類例はまったく知られていない²⁵⁾。

「十字架の時祷」の一時課に見る不可解な装飾生成の問題は、散りばめられたアルファベットや、それを収集する男女の姿だけでなく、余白装飾を構成する花輪にも指摘できる。当該モチーフについてアレクサンドル＝ビドンは、聖母マリアへの祈り「主の御母よ、我を心にとめたまえ」のイニシャル「O」の表象と見なし、祈祷文読誦を目的とした文字学習機能の一環と述べている²⁶⁾。他方、花輪の数が7つであることにくわえ、各花輪の背景が様に「聖母の共受難」を象徴する「青」で彩られていることに留意すれば²⁷⁾、1423年のケルン公会議で「聖母マリアの七つの喜び」に対応する祭礼として公認された「聖母マリアの七つの悲しみ」の表象とも見なしうる²⁸⁾。これは、7つの花輪が「聖母マリア」のみならず「キリストの受難」を象徴する花々——薔薇・スマイル・イチゴ・雛菊・カーネーション、そしてマンテマ——であることから妥当な解釈と言えるだろう²⁹⁾。

当時の時祷書に認められる多様な「聖母共受難」の表象方法に鑑みれば³⁰⁾、同様の意図を花輪の図像に見ることは可能であろう。しかしながら「割礼」あるいは「シメオンの予言」に始まり「埋葬」に終わる「聖母の七つの悲しみ」には「ピラトの審問」は含まれておらず、主題挿絵と余白装飾構成諸要素との関連性は依然として不明確である。では、各装飾モチーフの多元性が表象するものとは如何なるものだったのか。

装飾から祈祷へ

マルグリット時祷書の「聖ラウレンチウスへの執り成しの祈り」を飾る戦闘場面 (f. 171) [図版5] は、写本所有主との関連性が窺われる余白装飾のひとつである。アルバール・シャトレは、この図像を「1429年のオルレアンでの戦闘場面」としたケーニヒの解釈に強い疑念を表明しているが、仔細に検討すれば、緻密な描写が示すものは明らかである³¹⁾。まず、フランス軍旗に白抜き十字を伴う軍隊と、イギリス軍旗に赤抜き十字を伴う軍隊との対峙は、百年戦争の戦闘場面であることを示している。また、左下部の街の城壁には青地にユリの紋様と赤地に豹の紋様とを混合した軍旗が認められることから、イギリス軍に包囲されていた当時のオルレアンの姿も窺われる。

同時代の時祷書には、このような百年戦争関連の図像が散見する。しかしな

図版6 戦闘場面における櫛の木（部分）
Paris, BnF, ms. lat. 1156 B, f. 171.



図版7 『神』（部分） Paris,
BnF, ms. lat. 1156 B, f. 158 v.



図版8 『キリストの洗礼』（部分） Paris, BnF, ms. lat. 1156 B, f. 161 v.

がら、戦闘図像や武装した聖人・俗人表象の頻出は、一般的には男性所有の時祷書に見られる事象である³²⁾。またオルレアン奪回の戦闘時、マルグリットはすでにエタンプ公爵夫人となり、ジャン5世ブルターニュ公の下、経済的・政治的に安定していたナントで多くの日々を過ごした³³⁾。マルグリット時祷書における一見不可解な百年戦争図像の存在理由について、ケーニヒはマルグリットの異母兄弟であるジャン・ド・デュノワが当時オルレアンの管理と防衛を担っていた点に求めている。さらに彼は、当該戦闘図像の右上部に向けて撤退するイギリス兵達の姿に、マルグリットのオルレアン解放への祈念、あるいは戦勝記念の表象を認めている³⁴⁾。ただし、下部中央でイギリス兵を切り倒す兵士をジャンと同定する決定的な要因はなく、ケーニヒの関心が戦闘図像を構成する他の様々なモチーフに及ぶこともなかった。

むろん、中世末期の風景表現をなす多種多様な植物に必ずしも象徴機能が託されていたわけではない。周知のとおり、対立するフランス軍とイギリス軍を隔てている榿の木は、古くからフランスに自生した樹木として聖俗両図像の風景や季節表象の一環をなしてきた。ただし、キリスト教教義をはじめ民間生活や信仰および様々な芸術媒体において、榿の木がいくつもの象徴性を担っていることを考慮すれば³⁵⁾、その機能・意味を図像コンテキストと形相から検討する必要がある。かかる観点から注目すべきは、イギリス軍とフランス軍を分け隔てる榿の木が〔図版6〕、同写本における「神」(f. 158 v)〔図版7〕や「キリストの洗礼」(f. 161 v)〔図版8〕の余白部分に認められる作例と同様、3つの実をつけていることである。上記図像における榿の木が同一の形相であることを考え合わせれば、これを創世記の「マムレの榿の木」と見なすことはできまいか。

3人の訪問者が老齢の族長アブラハムの前に現れ、「マムレの榿の木」の下でサラとのあいだに子を授かると彼に告げる創世記の一節(18, 1-14)は、伝統的なキリスト教図像において「三位一体」の象徴とされてきた。たしかに、戦闘場面のなかに描かれた「マムレの榿の木」の選択意図を、ただちにこの聖書神話に結びつけることは難しい。だがイサクの誕生が、「アブラハムとその子孫に主の道を守らせ、正義と公正を行わせるため」(創世記 18, 19)だったことを想起すれば、ここにはマルグリットの願い——イギリス軍の包囲下にあったオルレアン家本拠の解放とオルレアン公シャルルの釈放——を代弁する画家の作

為が見てとれるのではあるまいか³⁶⁾。

櫛の木が「正義」と「公正」の表象として選択されていることは、戦闘風景を彩る他の植物の象徴性からも確認できる。戦闘場面の底辺部を覆いつくすのは古来「勝利」を象徴する月桂樹であり³⁷⁾、写本右下から上部にいたるイギリス軍の退路には様々な果樹が配置されている。葉や実の形状から、右上より順にリング・アウトウ・桃の木と確認できるものの、各果樹は写実的関心のもとに描かれているとは言いがたい。これらと同形態の表象が喚起するのは、旧約聖書の原典で単に「果樹」とのみ記されていた「善悪の知識の木」である。それらがすべて滅びゆくイギリス軍側に描かれていることに留意すれば、ここで意図されたのは精細な各樹木の描写でも、単なる風景表現でもなく、キリスト教図像の伝統的な「善」と「悪」の二元的な図式に「フランス軍」と「イギリス軍」の戦闘を重ね合わせることにある³⁸⁾。このような図像解釈は、主題挿絵の「聖ラウレンチウス」が名に戴いた「月桂樹」が「勝利」を象徴することにも確認できよう³⁹⁾。

マルグリットの画家の創意と写本所有主マルグリットの心性とが巧みに交錯していることはもはや疑いえない。さすれば、先に論じた「ピラトの審問」(f. 135) [図版4] の装飾プログラムにも、同様の検討をくわえる必要があるだろう。そのような観点から改めて「ピラトの審問を受ける捕らわれのキリスト」を検討すれば、オルレアン解放からさらに10年有余、英仏間の政治的な駆け引きの渦中にあったシャルルの姿が透けて見えてくる。さらに、「救済」を表す子女の文字学習帳や「聖母の共受難」を示す7つの花輪を図像コンテキストから包括的に解釈しなおせば、そこには子女達と兄の救済を希求するマルグリットの具体的な「祈りのかたち」が浮かび上がってくるであろう⁴⁰⁾。

結 語

すべての惨禍の要因を人間の罪に求め、改悛と救済が^{こいねが}希われていた中世末期において、日々の祈祷に使用される時祷書が、自己のみならず他者の魂の救済をも祈念する役割を担っていたことは周知である。かかる特質は、マルグリット時祷書においても「聖母子に祈りを捧げるマルグリット」と、それを取り囲む「サン・ジャック・ド・コンポステッラへの巡礼」(f. 25) [図版3] の多元的な図像解釈に詳しい⁴¹⁾。しかしながら、マルグリット時祷書はごく一般的な祈

祷文で構成されているため、私的な祈念の内実が問われることはなかった。そのアプローチはまた、マルグリットにかんする史料の著しい不足によっても阻まれてきた。

本稿では、マルグリット時祷書の制作過程や、各モチーフの多元性を考慮したうえで、写本と所有主の関係を問うた結果、当時捕らわれの身にあったシャルルの救済を祈念するマルグリットの姿を垣間見るにいたった。たしかに、このような見解を保証する決定的史料は現在のところ確認されていない。しかしながら今後は、マルグリット時祷書に認められる様々な「贖罪」や「救済」の表象を、単にキリスト教教義図像の一環としてだけでなく、写本所有主の個人的祈念の反映と捉える、そのような複合的なアプローチが求められてくるのではあるまいか⁴²⁾。

註

*) フランス国立図書館の当該ローマ使用式時祷書 (ms. lat. 1156 B) は、縦 207×横 148 ミリの 206 葉に、41 のミニアチュールが彩飾されている。それら全てがウェブサイト上で参照可能であるので (www.mandragore.bnf.fr)、本稿では主要図像のみを掲載する。ちなみに本稿は筆者の博士論文 (*La signification et la fonction symbolique de l'ornement végétal dans les livres d'heures bretons au XV^e siècle*, thèse de doctorat nouveau régime, Université Paris X, 2008, 2 vol.) を基盤としている。同論文が 2002 年に花王芸術・科学財団の助成を受けた『15 世紀フランス時祷書にみる植物紋様の図像学』の研究成果によることをここに記し、深くお礼申しあげる。研究成果のうち、すでに印刷公表したものは次のとおり—— «Une nouvelle réflexion sur le style de l'ornement végétal dans les livres d'heures bretons au XV^e siècle», in *Effets de style*, Aix-en-Provence: Presses Universitaires de Provence, coll. «Senefiance», à paraître. なお本稿では主要所蔵機関を以下の略号で示す—— BnF: Bibliothèque nationale de France; BRM: Bibliothèque de Rennes Métropole; Bm: Bibliothèque municipale; Bn: Bibliothèque nationale.

1) 時祷書の一般的な特質にかんしては主に以下を参照—— John HARTMAN, *L'Âge d'or des livres d'Heures*, Paris-Bruxelles: Elsevier-Séquoia, 1977, 192 pp.; Roger S. WIECK, *Time sanctified: the Book of hours in Medieval art and life*, New York-Baltimore: G. Braziller / The Walters art gallery, 1988, 230 pp.; id., *Painted prayers. The book of hours in medieval and Renaissance art*, New York: G. Braziller / The Pierpont Morgan Library, 1997, 144 pp.; 松田隆美『ヴェイジュア

- ル・リーディング』, ありな書房, 2010年, 254頁。
- 2) 当該期の写本画動向については主に次を参照—— André BLUM et Philippe LAUER, *La Miniature française aux XV^e et XVI^e siècles*, Paris-Bruxelles: Van Oest, 1930, 130 pp.; *The last flowering: french painting in manuscripts, 1420-1530 from American collection*, New York-London: Pierpont Morgan Library / Oxford University press, 1982, 123 pp.; Lilian-M. C. RANDALL, *Medieval and Renaissance manuscripts in the Walters art gallery, II. France, 1420-1540*, Baltimore-London: Johns Hopkins University Press / Walters art gallery, 1992, 730 pp.; François AVRIL et Nicole REYNAUD, *Quand la peinture était dans les livres: les manuscrits enluminés en France 1440-1520*, Paris: Flammarion / Bibliothèque Nationale, 1993, pp. 18-29.
 - 3) 余白装飾研究にかんしては主に以下を参照—— Lilian-M. C. RANDALL, *Image in the margins of gothique manuscripts*, Los Angeles-Berkeley: University of California press, 1966, 236 pp.; Michael CAMILLE, *Image dans les marges aux limites de l'art médiéval*, Paris: Gallimard, 1997, 247 pp.; Jean WIRTH, *Les Marges à Drôleries des manuscrits gothiques (1250-1350)*, Genève: Libr. Droz, 2008, 413 pp.
 - 4) Dublin, Chester Beanty Library, W. 82, f. 295. Michel MAUGER, *Bretagne chaoyante: enluminures et Histoire*, Rennes: Apogée, 2002, pp. 100-101.
 - 5) *Heures de Catherine de Rohan et Françoise de Dinan* (BRM, ms. 34, 34 bis, 34 ter). この考察の一部は、第63回美術史学会大会において口頭発表している。要旨については以下を参照——「15世紀ブルターニュ時祷書における祈禱像の多元的考察」, 『美術史』, 第169号, 美術史学会, 2010年10月, 135-136頁。
 - 6) 当該時祷書にかんする研究としては主に以下の文献を参照—— Victor LEROQUAIS, *Les Livres d'Heures manuscrits de Bibliothèque Nationale*, Paris: Bibliothèque Nationale, 1927, t. I, p. 67, pl. 46-50; Eberhard KÖNIG, *Les Heures de Marguerite d'Orléans*, Paris: Cerf-Bibliothèque nationale, 1991, 239 pp.; AVRIL et REYNAUD, *op. cit.*, pp. 28-29; notre mémoire de DEA, *Iconographie de la décoration végétale dans les livres d'heures français du XV^e siècle*, Université Paris X, 2000, pp. 33-53.
 - 7) ANSELM DE SAINTE MARIE, *Histoire généalogique et chronologique de la maison royale de France: grands officiers de la couronne et de la maison du Roy*, Paris: Didot frères, 1726-1733, t. I, pp. 205-207.
 - 8) Léon de LABORDE, *Les Ducs de Bourgogne*, Paris: Plon frères, 1852, t. III, n° 6313.
 - 9) KÖNIG, *op. cit.*, pp. 114-116.
 - 10) このような写本過程には、ブルターニュにおける写本画アトリエの存在の解明という課題を残す。それについては主に以下の文献を参照—— Eberhard KÖNIG, «Un atelier d'enluminure à Nantes et l'art du temps de Fouquet», *Revue de l'Art*,

- n° 35, 1977, pp. 64-75; id., «Enluminure à Rennes à la fin de la Guerre de Cent Ans», in *Artistes, artisans et production artistique en Bretagne au Moyen Âge*, Rennes: Université de Haute-Bretagne, 1983, pp. 121-126; Diane E. BOOTON, «School of Rennes reconsidered», *Gesta*, n° 44, 2005, pp. 31-45; id., *Manuscripts, Market and the Transition to Print in Late Medieval Brittany*, Surrey: Ashgate, 2010, pp. 50-95.
- 11) *Les Manuscrits à peintures en France du XIII^e au XVI^e siècle*, Paris: Impr. A. Tournon, 1955, pp. 113-115.
 - 12) KÖNIG, *Les Heures de Marguerite d'Orléans*, *op. cit.*, pp. 95-104. なお、マルグリットの画家が彩飾に携ったことが推察ないし確認されている時祷書として、以下のものが挙げられる——*Heures de Marie de Rieux* (BnF, ms. lat. 1170; Bm Tours, ms. 217; Pierpont Morgan Library, m. 190; Bn Edimbourg, dépôt du Collège catholique de Blairs, ms. 32); *Livre d'Heures à l'usage de Poitiers* (Bibliothèque Vatican, Rossiano, ms. 119); *Livre d'Heures* (BnF, ms. Rothschild. 2534).
 - 13) *Secrets de l'histoire naturelle* (BnF, mss. fr. 1377, fr. 1378, fr. 1379). ここにマルグリット時祷書に類出する幻想動物の着想源が指摘されている。Voir KÖNIG, *ibid.*, pp. 83-89.
 - 14) *Des cas des nobles hommes et des femmes* (Chantilly, Musée Condé, ms. 858).
 - 15) *Bible historique* (Bibliothèque de la chambre des députés à Paris, ms. 3); *Chansonniers* (BnF, ms. fr. 1596).
 - 16) 1440年に作成されたシャルルの蔵書目録には、マルグリットの蔵書として *Conquête de Jherusalem* の記録が残るが、未だ同定はされていない。Voir Gibert OUY, *La librairie des frères captifs: les manuscrits de Charles d'Orléans et Jean d'Angoulême*, Turnhout: Brepol, 2007, p. 51, n° 156.
 - 17) Pierre CHAMPION, *La Vie de Charles d'Orléans: 1394-1465*, Paris: Honoré Champion, coll. «Bibliothèque du XV^e siècle», 1911, pp. 19-20.
 - 18) シャルルの蔵書が、複写あるいは単に読むことを目的としてマルグリットや夫リシャルルに貸与されていた形跡は、以下の資料に確認できる——LABORDE, *op. cit.*, n° 6497-6498.
 - 19) これにかんしては、次の研究発表要旨を参照されたい——「フランス15世紀時祷書における植物装飾の役割と意義——マルグリット・ドルレアンの時祷書を用いて——」, 『日仏美術学会会報』, 日仏美術学会, 2005年, 第25号, 66-67頁; 『「マルグリット・ドルレアンの時祷書」における余白装飾の両義性』, 『美術史』美術史学会, 2011年, 第170号, 342頁。なお、季節の労働図像にかんしては主に次を参照——Perrine MANE, *Le Travail à la campagne au Moyen Âge: étude iconographique*, Paris: Picard, 2006, 471 pp.
 - 20) KÖNIG, *Les Heures de Marguerite d'Orléans*, *op. cit.*, p. 90.
 - 21) 同主題にかんするアレクサンドル＝ビドンの研究については以下を参照——Danièle

- ALEXANDRE-BIDON, « Abécédaires et alphabets éducatifs du XIII^e à la fin du XV^e siècle », *Nouvelles de l'estampe*, n° 90, décembre 1986, pp. 6-10; « Libertés et contraintes dans l'éducation des jeunes enfants à la fin du Moyen Âge », in *Les libertés au Moyen Âge*, Montbrison: Ville de Montbrison, 1987, pp. 241-252; « La lettre volée: apprendre à lire à l'enfant au Moyen Âge », *Annales E. S. C.*, juillet-août 1989, n° 4, pp. 953-992; « L'Arbre à alphabet », in *L'Arbre: histoire naturelle et symbolique de l'arbre, du bois et du fruit au Moyen Âge*, Paris: Le Léopard d'or, coll. « Cahier du Léopard d'or », 1993, pp. 127-143.
- 22) Martine PAUL-SEHL, *Recherche en vue d'une reconstitution matérielle du jardin médiéval à l'aide de documents historique, iconographiques et littéraires*, thèse inédite, EHESS, 1980, t. I, pp. 236-242.
- 23) Louis RÉAU, *op. cit.*, t. I, p. 133.
- 24) 「聖母の時祷」は「朝課」から「終課」の8課で構成され、各課冒頭のフォリオに主題挿絵や豪華な余白装飾が施されることが多かった。それにたいし「十字架の時祷」は通常、冒頭に「磔刑」の図像が挿入されるのみである。マルグリット時祷書のように各時課の冒頭に挿絵が配されている例は豪華時祷書に限られる。なお、マルグリット時祷書の「十字架の時祷」には「晩課」および「終課」の冒頭が欠如しているため、現在認められる挿絵主題は、朝課「ユダの裏切りとキリストの捕縛」(f. 133)、一時課「ピラトの審問」(f. 135)、三時課「十字架道行」(f. 137)、六時課「十字架建立」(f. 139)、九時課「磔刑」(f. 141)。
- 25) 文字学習帳の作例は以下の論文に多数指摘されている——ALEXANDRE-BIDON, « Abécédaires et alphabets éducatifs du XIII^e à la fin du XV^e siècle », *art. cit.*, pp. 6-10.
- 26) ALEXANDRE-BIDON, « La lettre volée: apprendre à lire à l'enfant au Moyen Âge », *art. cit.*, p. 982.
- 27) Michel PASTOUREAU, *Bleu, histoire d'une couleur*, Paris: Éd. du Seuil, 2002, p. 44.
- 28) Louis RÉAU, *Iconographie de l'art chrétien*, Paris: PUF, 1955-59, t. II-1, pp. 108-109.
- 29) 拙論, *La signification et la fonction symbolique de l'ornement végétal dans les livres d'heures bretons au XV^e siècle*, *op. cit.*, t. I, pp. 122-124 et 134-138.
- 30) 15世紀ブルターニュ時祷書における当該主題の作例にかんしては、前註にあげた拙論 (t. I, pp. 117-122) を参照。
- 31) Châtelet ALBERT, « Bibliographie critique », *Revue de l'Art*, n° 99, 1993, p. 83; KÖNIG, *Les Heures de Marguerite d'Orléans*, *op. cit.*, pp. 18-19.
- 32) 百年戦争の著しい影響は以下の時祷書に確認することができる——*Heures de Jean de Montauban* (BRM, ms. 1834); *Heures de Pierre II* (BnF, ms. lat. 1159); *Heures d'Étienne* CHEVALIER (Chantilly, Musée Condé. ms. 71)。
- 33) Jean-Pierre LEGUAY, « La Bretagne du neutralisme à la belligérance 1399-1453 »,

- in *Fastes et malheurs de la Bretagne ducale*, Rennes: Ouest-France, 1982, p. 194.
- 34) KÖNIG, *Les Heures de Marguerite d'Orléans*, *op. cit.*, pp. 18-19.
- 35) 拙論, *La signification et la fonction symbolique de l'ornement végétal dans les livres d'heures bretons au XV^e siècle*, *op. cit.*, t. I, pp. 73-74, 93-94 et 106.
- 36) 「正義」と「公正」の象徴機能は、ルイ9世が樅の木のそばで裁判を執り行ったことにもその一端が窺える (voir Michel PASTOUREAU, *Les emblèmes de la France*, Paris: Bonneton, 1998, p. 209)。なお、マルグリット時祷書には王族たる所有者の身分を想起させるモチーフが頻出するが、このことから「マムレの樅の木」がフランス軍の勝利、フランス王家の存続への祈念を象徴しているとも推察しうる。
- 37) Mirella LEVI D'ANCONA, *The Garden of the Renaissance: botanical symbolism in Italian painting*, Firenze: L. S. Olschki, 1977, p. 202.
- 38) じじつ、古フランス語の «ennemi» は「敵」と同時に「悪魔」を意味するものであった。かかる二元的表象は、マルグリットの画家の影響が指摘されている次の写本にも確認できる——*Heures de Jean de Montauban* (BRM, ms. 1834)。同写本の戦闘図像において、諸聖人の側には天使 (f. 119), それに敵対する部隊には悪魔 (f. 117) が描かれているのである。
- 39) Jacques de VORAGINE, *La Légende dorée*, Paris: Flammarion, 1967, t. II, pp. 68-69.
- 40) *Heures de Catherine de Rohan et Françoise de Dinan* の「ピラトの審問」とその余白装飾 (BRM, ms. 34. f. 11 v) [図版2] に、百年戦争下の政治的駆け引きのなかで捕囚の果てに非業の死を遂げることとなる、写本所有主の亡夫を想起させることもこの見解の証左となろう。
- 41) 拙稿, «Une nouvelle réflexion sur le style de l'ornement végétal dans les livres d'heures bretons au XV^e siècle», *op. cit.*, à paraître.
- 42) 筆者がこのような認識に至ったのは、鹿島美術財団の助成を受けて実施した、マルグリット時祷書における植物装飾の生成要因をオルレアン家の蔵書に求めた調査をつうじてである。ここに付記し、同財団に対し深甚なる謝意を表す。作業成果については、拙稿「マルグリット・ドルレアンの時祷書における植物装飾の創意源泉考察」, 『鹿島美術研究』, 鹿島美術財団, 第28号別冊, 2011年, 481-489頁を参照。